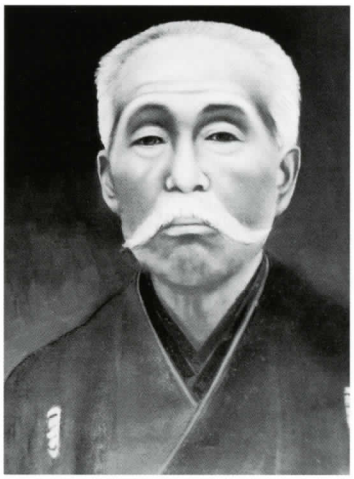
文化財ノート No.49

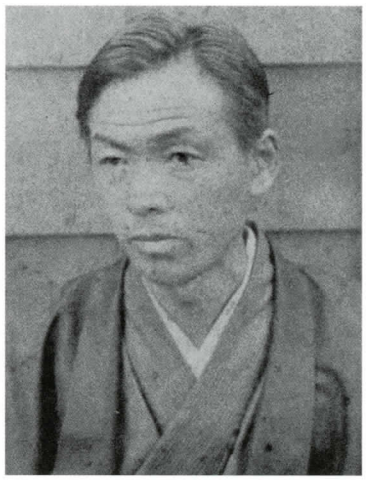
稲城市教育委員会
生涯学習課
稲城市東長沼2111
☎042－378－2111
発行　2005. 1. 31

「稲城」の地名の由来

明治22（1889）年４月１日、東長沼外五か村連合戸長役場の管轄下にあった、東長沼・矢野口・大丸・百村・坂浜・平尾の六か村は、町村制の公布に伴う町村統合によって一つの村となり、「稲城村」が誕生しました。稲城という名称は、この時に新しく命名された村名です。稲城村の誕生により同年４月25日には、東長沼の常楽寺において村議会の選挙が行なわれ、12名の議員が選出されています。さらに６月８日には初代村長に森清之助が就任しています。なお当時は北多摩郡上染屋村戸長役場の管轄にあった押立村は、この時に新しく誕生した「多磨村」に属することになりました。



稲城村初代村長、森清之助



奚疑塾創始者、窪全亮

鎌倉時代の山城、小沢城跡

町村合併は全国的な規模で行なわれましたが、新町村名の決定にあたって政府は、吸収合併の場合は大町村名を、対等合併の場合は旧村名称を「参互折中」して命名するように命じていました。稲城村の場合は、新村を構成することになる六か村にはきわだった大村はなく、当初から対等合併による新しい村名の検討が行なわれたと考えられます。合併の動きが進行するなかで、新村名についていろいろな候補があげられ、検討されたとおもわれますが、新村名の命名に関わる確実な資料は、今のところ発見されていません。残念ながら「稲城」の地名の由来を明確にすることはできていませんが、言い伝えや古い研究が残っており、それらを次に紹介して検討してみましょう。

東長沼の故川島琢象氏は、言い伝えとして父親である川島吉蔵の話を伝えています。それによると、東長沼外五か村連合戸長であり、のちの初代村長となる森清之助から新村名について相談をもちかけられた奚疑塾の創始者窪全亮が「稲穂」と「稲城」の二候補を示し、結局「稲城」が選定されたといいます。「稲城」の選定にあたっては、矢野口・東長沼・大丸の地に中世の砦（小沢城、長沼城、大丸城）があったという歴史的な事実と、この地が稲の産地であり、昔から良い米がとれたということが考慮されたといいます。「稲」と「城」を組み合わせて、新村名としたものです。（川島琢象『窪全亮先生と奚疑塾』昭和61年発行より）

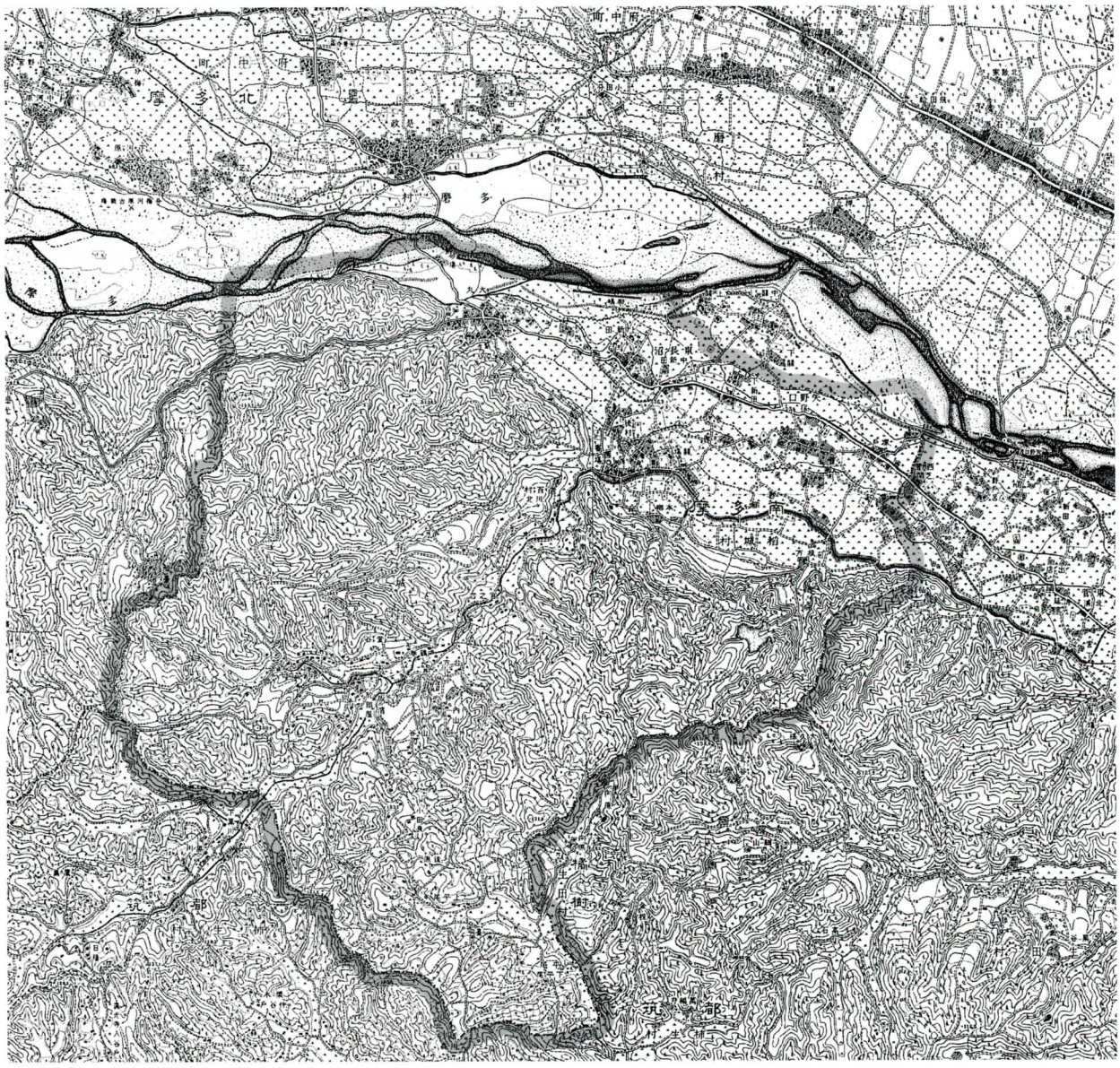
また、狛江の石井正義が、昭和７、８（1932、33）年頃に著した「武蔵野郷土地名稿（草稿）」（狛江市・故石井干城氏所蔵）には、「稲城村は稲毛村と称号すべきも許可なくして、稲城は稲毛の意義と

して命名せるなり」と記されています。この資料がどのような根拠から述べられたのかは明らかではありませんが、当初「稲毛村」が選ばれ、神奈川県へ上申されたが許可が得られず、字義のつうじる「稲城村」と命名したというものです。

「稲城」という村名の由来について記した資料は、以上の２点しか確認されていません。これらの資料はいずれも確実な歴史資料とは言えず、「稲城」の地名の由来を明らかにすることはできませんが、川島氏の伝える、中世の砦と稲の産地であることを組み合わせて命名したとする説は、市域の歴史的な事実やその当時の状況と考え合わせても妥当性があると思われます。また石井氏の資料による「稲毛村」と字義のつうじることから「稲城村」と命名したとする説も、市域が鎌倉時代初期の武将、稲毛三郎重成（いなげさぶろうしげなり）の所領であり、重成の子の小沢二郎重政の居城の跡が小沢城付近であった点を考え合わせると、不思議なことではないように思われます。

いずれにしても、新しい村の誕生にあたっては、多くの人々の思いがあって、検討が重ねられ最終的に「稲城」に落ち着いたものでしょう。現在のところ、「稲城」の地名の由来を明らかにすることはできませんが、今後の新しい具体的な資料が発見されることを期待したいところです。

参考文献.『稲城市史下巻』（稲城市）、『稲城市の地名と旧道』（稲城市教育委員会）



稲城村誕生からまもなくの頃の稲城市域／明治39（1906）年測量・国土地理院関東地方測量部提供
右側：「下布田」明治39年測量、縮尺1/2万（×0.44）
左側：「連光寺」明治39年測量、縮尺1/2万（×0.44）